平成 28 年 11 月 1 日

浜田市議会議長　西田　清久　様

議員名　　岡　本　　正　友　㊞

調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため視察等を行ったので、その結果を報告します。

記

1．期　間

平成28年 5 月 22 日（日）　10:00～12:00

2．研　修　内　容

市民公開講演会　　他人事でない「老後破産」

3．研　修　先

主　催　　島根県保険医協会

会　場　　ホテル宍道湖　2階会議室　松江市

4．調査経費

￥7,410円

（経費内訳　浜田駅～松江駅　(JR)　）

受講料　　無料

5．調査研究活動の概要

別紙のとおり

浜田市議会 受付 28.11.1

【研修の概要】

○研修名　　市民公開講演会　　他人事でない「老後破産」

病院にも行けない高齢者/NHK スペシャルの現場から

○日時：平成２８年5月２２日（日）午前 10 時～正午

○場所：ホテル宍道湖　　２階会議室（Ａ・Ｂ）
松江市西嫁島　　TEL０８５２－２５－１１５５

○主催：島根県保険医協会　　（よい医療をめざす医師・歯科医師の団体）
松江市浜乃木４－４－１　TEL０８５２－２５－６２５０

○講師：NHK スペシャル(2014 年９月 28 日放映
(老人漂流社会～“労委後破壊”の現実～

制作統括　板 垣　淑 子（いたがき よしこ）　氏

講師は、番組の制作統括を担当し番組ディレクターとして NHK スペシャル
「ワーキングプア」や「無縁社会」などを企画、制作している。

★　貧困問題＝「自己責任」を克服し、社会的な解決には何が必要か
⇒「最適解」見出す

第一歩

放送によって 40 代 50 代に大きな危機感
・2014 年９月 28 日、NHK スペシャル「老人漂流社会～“老後破産”の現実」が放映された

・経済的に追い詰められながら、生活保護を受けず年金だけのギリギリの生活を続けている状態を、NHK 取材班は「老後破産」と定義。
・ごく普通に送ってきた高齢者が病気や怪我をきっかけに陥った生活破綻、経済的困窮ゆえの受診(医療・介護)手控えなどの「老後破産」の実態に加え、そうした困窮者を救うはずの社会保障制度が現実に追い付いていない問題も提起して、特にこれから迎える 40 代や５０代の人たちに大きな反響があった。

〔1〕「無縁社会」の番組作りの背景・きっかけ
・2010 年以来「孤立死」が頻繁して、1,000 件を超える。
・何が起きているのかを知ることが取材のきっかけ

〔2〕「血縁」「社縁」「地縁」の３縁が薄くなっていく日本社会

・「血縁」が薄くなる。日本男性は一生独身で通す人は３人に１人おり、女性も４人に１人は一回も結婚しないライフスタイル。
・「社縁」非正規社員など仕事を通じた社会との縁も薄くなる。
・「地縁」地域との縁も心許なくなっている。
・民生委員の後継者が少ない。

〔3〕「老人漂流社会」の番組作りの背景・きっかけ

・支援の枠組みを利用することもできない人が孤立死していく社会を変えたい→番組等で発信
・高齢者ほど孤立することを認識→「老人漂流社会」をテーマに制作

〔4〕元気高齢者が些細なきっかけで社会を漂流する現実

・生活保護を受けたことで住居の確保
→国交省+労働省=「サービス付き高齢者住宅」
・都会から地方に移り住む事から知らない土地や人で会話がなくなる→認知症が急速に進む
・「他人に迷惑をかけてはならない」という意識
・日本の社会保障制度は利用者自身が申し込みをしないと受け入れない現実がある→申請できるのは血縁者/血縁者がいない状況も多い　→実際に福祉現場に委ねるケースが増えている
〔5〕社会福祉サービスが申請主義の中で、サービスを受けない人が多くいる

・①手助けが必要なのに社会福祉サービスを受けていない人の調査
・②重い認知症で生活能力不能で介護サービスを受けない人の調査
・①+②の集計 38,000 人以上の現実
・ごみ山の居室から出てくる認知症の高齢者→介護サービスを拒む
　　⇒血縁者がいない場合は成年後見人による法律的な対応
・介護保険制度と生活保護は「救う制度」であるが、一人暮らしの人にお節介する仕組みがないため必要でも得れない実態が増加
・認知症を認識できず徘徊したまま行方不明になるケース
　　→年間 1 万件以上(家族と同居しない状況の現実)
　　⇒社会のセーフティネットの見直し

〔6〕「無縁社会」・「老人漂流社会」を超えるために
・元気な時に何らかのつながりをつくる必要性
　　→(例)首都圏の団地では定年退職者の「見守り会」の結成
　　⇒名刺と役割と肩書きが意識を変えて交流が活発化
・団地の高齢者のごみ出し活動に 1 ヶ月 500 円の子どもの小遣い
　　→子どもを通して見守り情報を確保して孤立死 0 となる

・「地域のためと肌脱いで」と言われ地域のつながりのきっかけ

★「必要とされる」居場所つくることがつながりを作る一歩なる

★取り組みを共有化していく必要性

★地域ごとにきっかけを増やし「無縁社会」や「老人漂流社会を」を

乗り越えていく大きなうねりを作っていきたい

7・質疑応答

Q：課題や問題点を表し、そして理想的な形を追い求める番組づくりを期待するが…
A：これまでニュースの中など 30 件ほどの先進事例を紹介した。今後はインターネット発信の仕方を考える必要がある。このようなきっかけに地域で何ができるのかを考える機会にして欲しい。
Q:もっと情報が届けば孤立が解消されると考えるが、情報を得やすくするためには、何が必要か

A：無関心であることから難しい問題である。高齢者で経済的にまたは身体的弱者に近い状態にある方についてアウトリーチ(訪問)するなど、お節介を焼いていく仕組みを作らないと支援は行き届かないと思っている。

【所　感】

講演には、日曜日の行楽日和に関わらず、島根県各地から80人近い出席があり、会議室はほぼ満席の状況であった。

私自身この放送をみており、その実態と課題について深く知りたいと思って参加した。

主催者の冒頭のあいさつに、年金制度と医療費の負担額等の問題もあることからこの講演会を企画したとの説明があり、その後のテレビ放送の視聴と取材の状況説明を受けながら、その現実を知っていくにしたがって、私と同じような年代層(60代)や40代50代の多くの出席者の表情に、将来に不安を隠せない状況にみてとれた。「無縁社会」・「老人漂流社会」といわれる状況の課題解決に、『お節介する仕組み』の構築を提唱しているが、非常に同感ができる。また、何らかのつながりをつくる必要性から定年退職者の「見守会」の結成によって、名刺と役割と肩書きが意識を変えて交流がさらに活発化する話や、団地の高齢者のごみ出し活動に1ヶ月500円の子どもの小遣い制度など子どもを通しての見守活動も多いに参考となった。そして「地域のためとひと肌脱いで」と働きかけをして、地域のつながりのきっかけづくりや「必要とされる」居場所つくることがつながりを作る一歩など取り組みを共有化していく必要性を感じる。

私自身も、講師が提唱する地域ごとにきっかけづくりを増やし「無縁社会」や「老人漂流社会を」を乗り越える大きなうねりを作っていきたいと思ったところである